故安倍晉三國葬儀參列記

中島八十一

令和四年九月二十七日午後二時、故安倍晉三國葬儀始まる。

式に先立ち司會者勤むるフジテレビ女性アナウンサーの自己紹介あり、その際四千人餘の參集せる式場より日本人席滿場に拍手起これり。この拍手、當日の參加者の内に隱れたる基本的氣分を表したりや。

内閣官房長官の發聲を以て式次第はひとつづつ嚴肅に進みたり。國歌、默禱、故人の業績紹介の後、追悼の辭と續けり。内閣總理大臣の追悼、讀み上げたるそが内容、前後の所作は總理に相應しく、七百餘名の外交團に一國の威信を傳ふるに十分たり。次いで兩院議長のいづれにおきても短き私情を挾まぬ言辭を述べ、所作を含め威嚴持ちたることこの上無し。最高裁長官の、けだし代筆ならずして自らの筆になる文言を連ねたるは靜かなる感動を呼びたり。最後に友人代表として前總理の涙ぐみつつ述べたる惜別の辭は參列者すべてに強き共感を呼びたるに、話し終るや場内は感動に靜まれり。わづかなる間を置きて、そこここよりまばらなる拍手起こりたるに、やがて會場の四隅まで擴がる喝采となれり。反面、靜かに拍手靜まるを待つ者も少なからず居り、葬儀の何たるかを慮ってのことなり。

敕使、皇后宮使御拜禮並びに上皇使、上皇后宮使御拜禮の後、皇族の供花（くくわ）續けり。獻花は外交團に始まり、ヨルダン國王を先頭にして王族參列を見る國から並びたり。次いで大統領、首相となり、これらは國名及び個人名も讀み上げられ、外務大臣以下の國家にては國名のみの紹介となる。中國、臺灣、タイは國名のみにて、タイはいかなる國内事情ありやと却って印象に殘る。

參列者すべての獻花の始まりと共にそれまで三軍の軍樂隊演奏による葬送曲は一轉、菩提樹始め歐洲歌曲數曲續き、やがて本邦の曲に變れり。なだそうそう、川の流れのやうに、千の風になって、いつも何度でも（千と千尋の神隱し）等を三隊がローテーションを組みて奏したり。中途、安倍氏親族の田安門より徒歩にて入りたるに、入場の間のみ葬送曲に戻りたり。

此度は四千人すべてに獻花の機會を與へたれば、行列遲々として進まず、場内アナウンスにても一時間遲れ、これ退場者の車の手配圓滑ならざる故なりとぞ繰り返す。余の出番にてはほぼ二時間遲れなり。そのすべてに安倍夫人と總理の個人ごとに挨拶を受け、返し

たればその勞苦想像を超えたり。余は獻花を終へて式場を退きたれば式の幾時まで續きたるや知らず。

國葬の正に國威を發揚したればその意義大きかりけり。されど理由はとまれ、日本武道館の體育施設なれば、葬儀執り行はむが爲に相應しき場所なりや否やと訝しき心地せり。

（令和四年十月二十六日受附）